

# 変った話

寺田寅彦

青空文庫



## 一 電車で老子に会った話

中学で孔子や孟子のことは飽きるほど教わったが、老子のことはちつとも教わらなかつた。ただ自分等より一年前のクラスで、K先生という、少し風変り、というよりも奇行を以て有名な漢学者に教わつた友人達の受売り話によつて、孔子の教えと老子の教えとの間に存する重大な相違について、K先生の奇説なるものを伝聞し、そうして当時それを大変に面白いと思つたことがあつた。その話によると、K先生は教場の黒板へ粗末な富士山の絵を描いて、その麓に一匹の亀を這<sup>は</sup>わせ、そうして富士の頂上の少し下の

方に一羽の鶴をかきそえた。それから、富士の頂近く水平に一線を劃しておいて、さてこういう説明をしたそうである。「孔子の教えではここにこういう天井がある。それで麓の亀もよちよち登つて行けばいつかは鶴と同じ高さまで登れる。しかしこの天井を取払うと鶴はたちまち ちゅうてん 天に舞上がる。すると亀はもうとも追付く望みはないとばかりやけくそになつて、呑めや唄えで下界のどん底に止まる。その天井を取払つたのが老子の教えである」というのである。何のことだかちつとも分からぬ。しかし、この分からぬ話を聞いたとき、何となく孔子の教えよりは老子の教えの方が段ちがいに上等で本当のものではないかという疑いを起したのは事実であつた。富士山の上に天井があるのは嘘だらう

と思つたのであつた。

二十年の学校生活に暇いとまごい乞いとまごいをしてから以来、何かの機会に『老子』というものも一遍は覗いてみたいと思い立つたことは何度もあつた。その度ごとに本屋の書架から手頃らしいと思われる註釈本を物色しては買つて来て読みかけるのであるが、第一本文が無闇にむやみ六むつかしい上にその註釈なるものが、どれも大抵は何となかびく黴臭かびい雰囲氣の中を手捜りで連れて行かれるような感じのするものであつた。それらの書物を通して見た老子は妙にじじむさいばかりか、何となく偽善者らしい勿もつ体たいぶつた顔をしていて、どうも親しみを感じる訳には行かないでの、ついついおしまいまで通読する機会がなく、従つて老子に関する概念さえなしにこの年

月を過ごして来たのであつた。

つい近頃本屋の棚で薄っぺらな「インゼル・ビュフェライ叢書」をひやかしていたら、アレクサンダー・ウラールという人の『老子』というのが出て來た。たつた七十一頁の小冊子である。値段が安いのと表紙の色刷の模様が面白いのとで何の氣なしにそれを買つて電車に乗つた。そうしてところどころをあけて読んでみるとなかなか面白いことが書いてあつて、それが実によくわかる。

面白いから通読してみる気になつて第一頁から順々に読んで行つた。原著の方は知らないのであるから誤訳があろうがあるまいが、そんなことは分かるはずもなし、またいくらちがついていもそんなことは構わない。ただいかにも面白いのでうかうかと二、三十

章を一ひと息いきに読んでしまつた。そうしてその後二、三回の電車の道中に知らず知らず全巻を卒業してしまつたのである。

不思議なことには、このドイツ語で紹介された老子はもはや薄汚い唐人服を着たにがにがにがとこわい顔をした貧血老人ではなくて、さつぱりとした明るい色の背広に暖かそうなオーバーを着た童顔でブロンドのドイツ人である。どこかケーベルさんに似ている、というよりはむしろケーベルさんそつくりの老人である。それが電車の中で隣席に腰かけていて、そうして明晰に爽快なドイツ語でゆつくりゆつくり自分に分かるように話してくれるのである。その話が実に面白い。哲学の講義のようでもあり、また最も実用的な処世訓のようでもあり、どうかするとまた相対性理論や非ユ

一クリツド幾何学の話のようでもある。そうかと思うと、また今  
の時節には少しどうかと心配されるような非戦論を滔々と述べ  
聞かすのであつた。

同じ思想が、支那服を着ていてそうして栄養不良の漢学者に手  
を引かれてよぼよぼ出て来たのではどうしても理解が出来なかつ  
たのに、それが背広にオーバー姿で電車の中でひよつくり隣合つ  
てドイツ語で話しかけられたばかりに一遍に友達になつてしまつ  
たような体裁である。こんなことから考えてみると、我国固有の  
国民思想を保存し涵養させるのでも、いつまでも源平時代の鎧よ  
ろいかぶと兜を着た日本魂や、滋籐の弓を提げた忠君愛国ばかり  
を学校で教えるよりも、時にはやはり背広を着て折鞆でも抱

えた日本魂をも教える方がよくはないかという気がしたのである。

それはとにかく、このドイツ訳がどれくらい原著に忠実であるかということは自分には分かりかねるが、しかしどころどころあたってみるとかなり在来の日本人の註釈などとはちがつていて誤訳ではないかと思うところもある。しかしこのドイツ訳の方がともかくも話の筋がよく通つていて読んで分かりやすいことだけはたしかである。例えば「大方無隅。<sup>たいほうむぐう</sup> 大器晚成。<sup>たいきばんせい</sup> 大音希声。<sup>たいおんきせい</sup> 大象無形。<sup>たいじょうむけい</sup>」というのを「無限に大きな四角には角がない。

無限に大きい容器は何物をも包蔵しない。無限に大きい音は声がない。無限に大きな像には形態がない」と訳してある。「大器晚成」の訳は明らかにちがつているようではあるが、他の三句に対

してはこの訳の方がぴつたりよく適合するから妙である。それは別として、こここのドイツ訳は数学者や物理学者にとつてなかなか面白く読まれるであろう。同様な意味で面白いのは「大曰逝い。せいをえんといい」遠曰遠。えんをはんという」の最後の句を「無限の遠方は復帰である」と訳してあるが、これはアインシュタインの宇宙を指しているようで面白い。また「無有入於無間」を「個体性のないものは連續的物質中に侵入する」と訳しているが、これは、何となく古典物理学のエーテルを云つてているようで面白い。「故致數車無車」を「部分の総和は全體ではない」と訳しているのでも、当否は別としてやはり面白い。欠けた硝子片を寄せたものは破れない硝子板にはならないのであ  
ガラス

る。

老子は虚無を説くから危険思想だとこわがる人があるそうである。しかし自分が電車で巡り合つた老子の虚無は円満具足を意味する虚無であつて、空っぽの虚無とは全く別物であつた。老子の無為は自覚的には無為であるが実は無意識の大なる有為であつた。危険どころかこれほど安全な道はないであろう。充実したつもりで空虚な隙間だらけの器物はあぶなく、有為なつもりの無能は常に大怪我の基である。老子の忠告を聞流しているために恐ろしい怪我や大きな損をした個人や国家は歴史のどの頁にもいっぱいである。

桃太郎や猿蟹合戦のお伽<sup>とぎ</sup>ばなし 嘸<sup>ばなし</sup> できえ危険思想宣伝の種にする

先生方の手にかかれれば老子はもちろん孔子でも孟子でも釈尊でもマホメットでもどのような風に解釈されどのような道具に使われるかそれは分からぬ。しかし『道徳教』でも『論語』でもコーランでも結局はわれわれの智慧を養う蛋白質たんぱくしつや脂肪や澱粉でんぶんである。たまたま腐つた蛋白を喰つて中毒した人があつたからと云つて蛋白質を厳禁すれば衰弱する。

電車で逢つた背広服の老子のどの言葉を国定教科書の中に入れていけないといふわれを見出すことが出来なかつた。日本魂を腐蝕する毒素の代りにそれを現代に活かす靈液でも、搜せばこの智恵の泉の底から湧わき出すかもしれない。

電車で逢つた老子はうららかであつた。電車の窓越しに人の頸く

筋ひすじを撫なでる小春の日光のようにうららかであつたのである。

## 二 二千年前に電波通信法があつた話

歐洲大戰の正に酣たけなわなる頃、アメリカのイリノイス大学の先生方が寄り集まつて古代ギリシアの兵法書の翻訳を始めた。その訳は、人間の頭で考え得られる大概の事は昔のギリシア人が考えてしまつてゐる、それだからギリシアの戦術を研究すれば何かしらきつと今度の戦争に役に立つような、参考になるようなうまい考えの掘出しどのが見付かるだらう、というのであつた。それで大勢のギリシア学者が寄合い討論をして翻訳をした、その結果が「ロイ

「古典叢書」の一冊として出版され、我邦わがくににも輸入されている。

その巻頭に訳載されている「兵法家アイネアス」を冬の夜長の催眠剤のつもりで読んでみた。読んでいるうちに実に意外にも今を去る二千数百年前のギリシア人が実際に巧妙な方法でしかも電波によつて遠距離通信テレグラフィーを実行していたという驚くべき記録に逢つてすつかり眠気をさまされてしまつたのである。尤も電波とは云つてもそれは今のラジオのような波長の長い電波ではなくて、ずっと波長の短い光波を使つた烽火のろしの一種であるからそれだけならばあって珍しくない、と云えば云われるかもしれないが、しかしその通信の方法は全く掛け値なしに巧妙なものといわなければならぬ。その方法というのは次のようなものである。

先ず同じ形で同じ寸法の壺のような土器を二つ揃える。次にこの器の口よりもずっと小さい木栓を一つずつ作つてその真中におのおの一本の棒を立てる。この棒に幾筋も横線を刻んで棒の側面を区分しておいてそれからその一区分ごとに色々な簡単な通信文を書く。例えば第一区には「敵騎兵团境に進入」第二区には「重甲兵来る」と云つた風な、最も普通に起り得べき色々な場合を予想してそれに関する通信文を記入しておく。次にこの土器に水を同じ高さに入れておいてこの木栓を浮かせると両方の棒は同高になること勿論である。そこでこの容器の底に穴を開けて水を流出させれば水面の降下につれて栓と棒とが降下するのであるが、その穴の大きさをうまく調節すると二つの土器の二つの棒が全く同

じ速度で降下しいつでも同じ通信文が同時に容器の口のところに来ているようになるのである。このような調節が出来たらこの二つの土器を、互いに通信を交わしたいと思う甲乙の二地点に一つずつ運んでおく。そこで甲地から乙地に通信をしようと思うときには先ず甲で松明たいまつを上げる。乙地でそれを認めたらすぐ返答にその松明を上げて同時に土器の底の栓を抜いて放水を始める。甲地でも乙の松明の上がると同時に底の栓を抜く。そして浮かしてある栓の棒がだんだんに下がつて行つて丁度所要の文句を書いた区分線が器の口と同高になつた時を見すましてもう一度烽火をあげる。乙の方ではその合図の火影を認めた瞬間にぴたりと水の流出を止めて、そうして器の口に当る区分の文句を読むという寸

法である。

話は変るが、一九一〇年頃ベルリン近郊の有名な某電機会社を見学に行つたときに同社の専売の電信印字機を見せてもらつた。発信機の方はピアノの鍵盤のようなものにアルファベットが書いてあつて、それで通信文をたたいて行くと受信機の方ではタイプライターが働いて紙テープの上にその文句をそつくりそのままに印刷して行く仕掛けである。この機械の主要な部分は発信機と受信機と両方に精密に同時に回転する車輪である。すべての仕掛けはこの車の同時調節シンクロニゼーションによつて有効になるので、試みにわざとちよつとばかりこの調節を狂わせると、もう受信機の印刷する文句はまるきり訳の分からぬ寝言にもならない活字の行列になつ

てしまうのである。

この二十世紀の巧妙な有線電信機の生命となつてゐる 同時  
調節トシヨン の応用も、その根本原理においては前記の古代ギリシア  
の二千何百年前の無線光波通信機の原理と少しも変つたことはな  
いのである。

写真電送機械の機構にもやはり同様な原理が応用されている。

この場合には土器を漏れる水の代りにフィルムを巻いた回転円筒  
が使われ、棒に刻んだ線を人間が眼で見て烽火を擧げる代りに真  
空光電管の眼で見た相図あいざを電流で送るのである。

自働電話の送信器の数字盤が廻るときのカチカチ鳴る音と自働  
連続機のピカピカと光る豆電燈の瞬きもやはり同じような考え方

応用して出来た機構の産物であると見れば見られなくはないであろう。

このように、二千年前の骨董こつとうの中にも現代最新の発明の種があるとすれば、同じ塵の中には未来の新発明の品玉がまだまだいくらも藏されているかも知れない。

「アーチ、そんなものは君、もう二十年も前にドイツの何某が試みて失敗したものだよ」といつたようなことをしたり顔に云つて他人の眞面目なそうして実際はかなり有望な独創的研究をあたまからけなしつけるようないわゆる大家も決して珍しくはない。「それは君、昔フランスでやつたものだよ」と云つて若い技師の進言を言下に退ける局長もまた珍しくはないであろう。これらの大家

や局長がアイネアスの兵法を読んでいなかつたおかげで電信印字機や写真放送機が完成したかもしれない。ある。

### 三 御馳走を喰うと風邪を引く話

昔、自分の勤めていた役所にMという故参こさんの助手がいた。かな

りの皮肉屋であつたが、ときどき面白い觀察の眼を人間一般の弱点の上に向けて一風變つたりマークをすることがあつた。その男の變つた所説の一例を挙げると、自分が風邪を引いて熱を出したりしたとき「アンマリ御馳走を喰べ過ぎるんじやあないですか」と云つてはにやにや笑うのであつた。

御馳走を喰うと風邪を引くというのは一体どういう意味だか分からなかつた。御馳走を喰えば栄養になり、喰い過ぎれば腹下りを起こすくらいのことは知つていたが、この、医学者でも物理学者でも何でもない助手M君の感冒起因説は当時の自分の医学上の知識を超越していたのである。

しかし、その当時気のついていたことは、何かしら自分の研究仕事にうまい糸口が見付かつてそれですっかり嬉しくなつて仕事に夢中になる、そういう時にどうもきまつて風邪を引くらしいということである。尤もこれとてもそういう時にひいた風邪だけが特に記憶に残るので、それでそういう片手落ちの結論に導かれたのかもしれないが、しかし、そなばかりでもないと思われる理由

はたしかにある。そう云つた風に夢中になつているときには、暑さや寒さに対して室温並びに衣服の調節を怠るような場合がどうしても多い上に、身心ともに過労に陥るのを気持の緊張のために忘却して無理をしがちになるから自然風邪のみならずいろんな病気に罹りやすいような条件が具備する訳かと思われるるのである。

そうだとすると、これは精神的の御馳走を喰い過ぎたために風邪を引くのだと、云えば云われなくもないであろう。

しかし、その当時に、当時には御馳走と思われた牛鍋や安洋食を腹いっぱいに喰つて、それあとで風邪を引いたというはつきりした経験はついぞ持合わせず、従つてM君の所説は一向に無意味なただの悪ware口としか評価されないで閑却されていたの

である。

ところが、おかしなことにはつい近年になつてこのM君の無意味らしく思われた言葉が少しずつ幾分かの意味を附加されて記憶の中に甦よみがえつて来るような気がする、というのは、どうかして宴会や友達との会合などが引続いて毎日御馳走を喰つていると、その揚句あげくにふいと風邪を引くというような経験がどうも実際に多いような気がして來たのである。御馳走の直接の結果であるか、それとも御馳走に随伴する心身の疲労のためだかその点は分からないうが、とにかく事実そういう場合が多いらしい。

昔から、粗食が長寿の一法だとの説がある。これは考えてみると我がM君の説を裏側から云つたもののように思われて来る。一

体普通の道理から云うと年をとればうまいものを喰つて栄養をよくした方がよさそうに思われるが、うまいものはついつい喰い過ぎる恐れがある。しかし、まずいものは喰い過ぎたくても喰い過ぎる心配が少ない。つまり、粗食それ自身がいいのではなくて喰い過ぎないことがいいのかもしれない。もしか粗末なものを喰い過ぎることが出来たらその結果は御馳走の飽食よりもつと悪いかもしれませんのであろう。そうだとすると、結局、なるべくうまい上等の御馳走を少し喰つているのが一番の長寿法だということになるかもしれない。これはやさしそうでなかなか六かしいことらしい。

胃が悪い悪いと年中こぼしながら存外人並以上に永生きをした

老人を数人知つてゐる。これも御馳走を喰い過ぎたくとも喰い過ぎられなかつたおかげかもしけないと思われる。食慾不振のおかげで、御馳走がまづく喰われるという幸運を持合せたのであろう。何が仕合せになるかもしれないのである。

#### 四 半分風邪を引いていると風邪を引かぬ話

流感が流行る<sup>はや</sup>という噂である。竹の花が咲くと流感が流行るという説があつたが今年はどうであつたか。マスクをかけて歩く人が多いということは感冒が流行している証拠にはならない。流行の噂に恐怖している人の多いという証拠になるだけである。

流感は初期にかかると軽いが後になるほど悪性だとよく人が云う。黴菌ばいきんがだんだん悪ずれがして来て黴菌の「ヒト」が悪くなるせいでもなさそうである。

流行の初期に慌てて罹る人は元来抵抗力の弱い人ではないかと思う。そういう弱い人は、ちよつと少しばかり熱でも出るとすぐにまいってしまつて欠勤して蒲団ふとんを引っかぶつて寝込んで静養する。すればどんな病気でも大抵は軽症ですんでしまう。ところが、抵抗力の強い人は罹りびよう病の確率が少ないから統計上自然に跡廻しになりやすい、そうしてそういう人は罹つても少々のことではなかなか最初から降参してしまわない。そうして不必要で危険な我慢をし無理をする、すれば大抵の病気は悪くなる。そうしていよいよ

いよ寝込む頃にはもうだいぶ病気は亢進こうしんして危険に接近しているであろう。実際平生丈夫な人の中には、無理をして病気をこじらせるのを最高の榮誉と思つているのではないかと思われる人もあるようである。

自慢にならぬことを自慢するようで可笑おかしいが、自分などは冬

中はいつでも半分風邪を引いている。詳しく言えば、風邪の症状を軽微なる程度において不斷に享樂している。無理をしたくても出来ないという有難い状況に常住しているのである。そのために、あらゆる義理を欠き、あらゆる御無沙汰をして、寒さを逃げ廻つては、こそそと一番大事なと思う仕事だけを少しづつしている。そのお蔭で幸いに今年はまだ流感に冒されず従つて肺炎にもなら

ずに今日までたどりついたような気がする。ましてや雪の山で遭難して世間を騒がす心配などは絶対になくてすんでいるわけである。

危険線のすぐ近くまで来てうろうろしているものが存外その境界線を越えずに済む、ということは病気ばかりとは限らないようである。ありとあらゆる罪惡の淵の崖の傍をうろうろして落込みはしないかとびくびくしている人間が存外生涯を無事に過ごすことがある一方で、そういう罪惡とおよそ懸けはなれたと思われる清淨無垢のむく人間が、自分も他人も誰知らぬ間に駆足で飛んで来る。心の罪の重荷が足にからまつて自由を束縛されている人間は

却つて現実の罪の境界線が越えにくいこともあるかもしれない。ある。

今に戦争になるかもしれないというかなりに大きな確率を眼前に認めて、国々が一生懸命に負けない用意をして、そうしてなるべくなら戦争にならないで世界の平和を存続したいという念願を忘れずにいれば、存外永遠の平和が保たれるかもしれないと思われる。もしも、いつも半分風邪を引いているのが風邪を引かぬための妙策だという変痴奇論<sup>へんちきろん</sup>に半面の真理が含まれているとすると、その類推からして、いつも非常時の一步手前の心持を持続するのが本当の非常時を招致しないための護符になるという変痴奇論にもまたいくらかの真実があるかもしれないと思われる。

このような変痴奇論を敷衍<sup>ふえん</sup>して行くと実に途方もない妙な議論が色々生まれて来るらしい。例えば孔子の教えた中庸ということでも解釈のしようによつては「いつも半分風邪を引いているように」という風に受取れるかもしない。生まれてから七、八十歳で死ぬまで一度も風邪を引かないような人があつたら、はたが迷惑かもしれない。クリストに云わせて、それほどに健康では切れそうだ、狭い天国の門を潜るにも都合が悪いであろう。

あえて半分風邪を引くことを人に対するすめのではない。弱いもののが負惜しみの中にも半面の真があるというだけの話である。

星の世界の住民が大砲弾に乗込んで地球に進入し、ロンドン附近で散々に暴れ廻り、今にも地球が焦土となるかと思つていると、

どうしたことか急にぱつたりと活動を停止する。変だと思つてよく調べてみると、星の世界には悪い黴菌がいないために黴菌に対する抗毒素を持合わせない彼の星の住民は、地球上の数々の黴菌に会つて一たまりもなく全滅した。こういう架空小説を書いた人がある。

あまり理想的に完全なマスクをかけて歩いているとついマスクを取つた瞬間にこの星の国の住民のような目に会いはしないか。そんなことを考えると、うつかりマスクを人にすすめることも出来ない。それかと云つてマスクをやめると人に強いる勇氣もない。ただ世の中にマスク人種と非マスク人種との存在する事実を実に意味の深い現象としてぼんやり眺めているばかりである。

（昭和九年三月『経済往来』）

# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第四巻」岩波書店

1997（平成9）年3月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 文学篇」岩波書店

1985（昭和60）年7月

※この作品は「経済往来」（昭和9年3月1日）に発表された。署名「吉村冬彦」。「触媒」に収録（底本の「後記」433ページより）

入力：砂場清隆

校正：青野弘美

2003年2月24日作成

### 青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 変った話

## 寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>